

川崎病の病因および発症機序 に関する免疫病理学的研究

武村 民子 （日本赤十字社医療センター 中央検査部）

1. 川崎病急性期の皮膚病変の電子顕微鏡的観察

川崎病急性期の皮膚病変は紅斑を伴う硬性浮腫を特徴とし、BCG接種部位に特にその変化が強く現われることが知られているが、電顕的観察は未だ十分になされていない。日赤医療センター小児科で、これまで5例の川崎病急性期皮膚生検の電顕材料があり、光顕所見とあわせて皮膚病変の形態像を観察し、その特異性について検討した。血管透過性の亢進を裏図ける電顕所見で、真皮表層の毛細血管基底膜の多層化（lamellation）・内皮細胞の腫大・その胞体内のmyelin figureの存在があるもvirus様粒子は確認されなかった。BCG接種部位は、より滲出傾向が強い。

2. BCG接種部位の皮膚病変がなぜ強く生ずるのかについて

BCG菌や結核菌と共通の抗原をもつ成分としてMuramyl-dipeptide（MDP）が考えられるところから、患者のMDPに対する抗価測定をELISA法にて現在、新生児・小児のcontrolを測定。

3. 川崎病急性期のリンパ節病変の電子顕微鏡的観察

急性期に頸部リンパ節腫脹がみられるが、発熱期故、その生検はこれまで積極的に施行されていなかった。日赤医療センターで3例のリンパ節生検電顕材料を検討。特にリンパ球やmonocyte中にvirus様粒子が確認されるか、現在尚多数超薄切片にて観察を続行している。